



仏教・真宗を楽しく学びながら

生活に活かす講座 VI-01

今からはじめる仏教入門

第一回 仏教以前と釈尊の生涯（前半）

2022年4月26日 / 厳念寺

講師：ケネス田中先生

武蔵野大学名誉教授

連絡先：chacotanaka@gmail.com

（質問・意見歓迎）

# 第一回 仏教以前と釈尊の生涯（前半）

四月二十六日

はじめに

- ① 講座について
- ② 仏教を学ぶにあたって

## Ⅰ 仏教以前

- ① インダス文明
- ② アーリア民族のインドへの移住
- ④ バラモン教
- ④ ウパニシャッド
- ⑤ ガンジス河の宗教の登場
- ⑥ ガンジス河の宗教と西洋の宗教

## 〈質疑応答 ①〉

## Ⅱ 釈尊の生涯

釈尊の歴史的存在

- ① 誕生
- ② 青年期

- ③ 四門出遊
- ④ 出家

## 〈質疑応答 ②〉

38

29

23

6

1

## はじめに

### ① 講座について

レジュメの最初に講座の各回に予定しているテーマを取り上げました。今年度は「初めて学ぶ仏教」というテーマでお話させていただきました。第一回目は、五年前の初年度とは変えて、以前にはお話ししていないような内容も加えてみました。今日は「お釈迦様（仏教）以前の歴史」についても前半に話します。講座の全体の内容としては、仏教の中核となる教え―四聖諦・業・八正道・六波羅蜜・四法印等々ですが、初年度とはいくらかカラーを変えてみたいと思っています。

四月 ― 仏教以前と釈尊の生涯（一）

五月 ― 釈尊の生涯（二）、その後の発展

六月 ― 四聖諦

七月 ― 業と八正道・六波羅蜜

九月 ― 四法印

十月 ― 比喩、説話

十一月 — 日常の問題・質問

十二月 — 世界を変える仏教 : セイロンのJ.R. Jayawardane大統領

インドのDr.B.R.Ambedkar

マインドフルネス現象

また「釈尊しやくそん（お釈迦様）」の生涯に関しては、『釈尊の道 — その生涯』（小山一行著／山喜房佛書林、一九七七年）は、とても分かりやすいので、これを主に参考にし、文章もそのまま多く採用させてもらったことを断っておきます。小山先生は九州の筑紫学園大学の学長も務めたこともおありで、また、私の武蔵野大学の時の同僚でした。

はじめに

② 仏教を学ぶにあたって

(a) 知識と智慧ちえの違い ↓ 仏へ道へ

(b) 三慧さんね || 聞もん・思し・修

(c) 一人称

※与楽拔苦／転迷開悟

「仏教を学ぶ」ということは、普通の学問を学ぶということとは違うんですね。知識を得て、それを蓄えていくとこう感じではなくて、やはり「智慧を体得する（体解）」ということなんです。それでは「知識」と「智慧」とはどのような違いのかと言つと、「智慧」というのは、自分自身に当てはめる。自分のいろいろな課題に当てはめて、その課題を解決する見方・考え方・感じ方を蓄えることです。ですから、たくさん知っていること自体は、本来の〈仏道〉には、それほど重要ではないのです。仏道というのは、仏教を生きる事に活かした生き方です。「仏教、仏教」と言つて、少し頭でっかちになるのは外れています。やはり「智慧」ということを体得する。それが〈仏道〉なんです。仏教ではなくて仏道です。だから、ちゃんとやらないと「ブツどう！」（笑）。

「三慧（聞・思・修）」というのは、これは仏教の基本となる姿勢です。聞いて（聞）、考えて（思）、実践する（修）。この三つを忘れないでください。この講座での話を聞いて、自分なりに考えてください。だから皆さんもアンケートにも答えて、質問したりすることによって、考える・思う。これも仏道の一角です。そして「修」というのは、それを日常に実践する。

「一人称」ということは、一般論ではなく、私自身のこととして学ぶという意味です。仏教というのは〈私（自身）〉が課題なんです。矢が刺さっているのは〈私〉なんです。釈尊による譬喩の

はじめに

物語（毒矢の譬喩）にもあるように、撃たれた矢に関して、いろいろな知識を聞いて得るのではなくて、まずその矢を抜きましようというのです。

仏教には「**拔苦与楽**」<sup>はつくよらく</sup>という言葉があります。苦を抜いて楽を与えろということが仏教の課題です。「苦」ということは、仏教ではよく語られていることです。仏教は悲観的な宗教であるといふようなことを言われたりすることがあります。仏教は現実には体験する「苦」——社会において体験する苦。人間関係において体験する苦。このよつな家族の中でもあまり話し合われないよつな苦の課題を仏教では語るのです。

私はしばしば「人生はデコボコ道だ（Life is a Bumpy road.（一切皆苦）」と言っています。人生の中でいろいろな困難が私たちにしばしば訪れます。「四苦八苦」といふ言葉もありますよね。特に老・病・死という苦があります。

私の個人的な話になりますが、この二週間ほどの間に二人の友人を突然なくなりました。私よりも一、二歳くらい若い同僚で、二人とも元気だったのですよね。朝になってから、仕事にも来なかったのを探しに行ったら、ベッドで亡くなっていたそうです。とてもショックが続きました。そして、もっと言いづらいことは、私の長男の妻が、三十四歳の若さなのですが、現在は危篤状態です。ですから、この二、三日は大変です。今日、ニューヨークから電話があって、家族全員で、テレビ電話を通して

話しかけました。

私の両親のように九十歳代で亡くなるのであれば受け容れやすいのですけれども、何で三十四歳の若い、頭の良い、すばらしい性格の人がこんなふうになるのかと。しかし、こうした苦悩・悲しみについても仏教では教え説かれています。仏教について学んで来ることがあったから、家内も私も、仏教を知らないでいるよりも、向き合い・対応することができていたのではないかと思うのです。

悲しいこと、辛いことには変わりありません。けれども、仏教の教えがあるから、ないよりもはるかに良いと思っています。皆さんにもこうした不条理と思つ苦悩・困難が必ず訪れます。既に訪れている方もいらっしゃると思います。しかし、この仏教を学ぶことによって、それに対応できる力、悩める力というものが身につくのではないかと思えます。

それにはどうするのかというと、「てんめい転迷開悟かいし（迷いを転じて悟りを開く）」という言葉があります。簡単なことではありませんけれども、少しでも迷いを転じる。少しでも悟った考え（感じ方・受け取り方）を開く。そうすることによって、苦悩や困難というものに対応できると思えます。ですから、この講座で話す時には「一人称」——自分の課題として学ぶことが大切です。まず自分に当てはめて、そして前に進むとこういふことです。

はじめに

（I） 仏教以前

さて、第一回の講義の前半は、今まで話したことのないテーマーお釈迦様以前のインドにおける歴史に関してです。お釈迦様はだいたい紀元前五百年くらいに生まれて活躍されました。当然その前に歴史があります。インダス文明、アーリア人とバラモン教、ヒンドゥー教という、仏教の背景となるいくつかの流れとなる事柄があります。

① インダス文明

（ア） インドの文明は、紀元前二六〇〇年～紀元前一八〇〇年に繁栄したインダス文明によるところが多い。

（イ） 母系的な家族構成。

（ウ） 銅器を使用し、高度の技術を有していた。

（エ） 瞑想のような行為。

（オ） 紀元前一八〇〇年頃に滅びる。原因としては諸説がある。その一つがアーリア民族の侵入だが、近年は否定されている。



うことです。そこで、次に課題となることは「アリア民族の侵入」ということとなります。

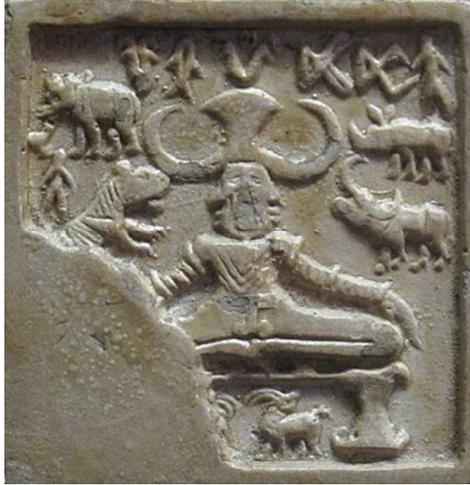
インダス文明というのは、現在のパキスタンのインダス川流域で起こっています（**インダス文明地図**／<https://www.google.co.jp/search?q=インダス文明>）。ハラッパーとかモエンジョダロという地名の遺跡などが有名です。そしてインド地図の右側（東側）にはガンジス川が流れています。この川は仏教にとってはとても深い関係があります。

ここに紹介してある発掘された出土品の人形（**インダス文明出土品**／**出典**：nikkei-science.com <https://www.nikkei-science.com/page/magazine/0310/indus.html>）は、この顔の表情から類推して、「瞑想」の要素がインダス文明にはあったのではないかと言われています。つぎの写真の中央に刻まれている人の姿（**インダス谷の遺跡発掘の中で見つけた印章**。**結跏趺坐を組むヨーギー**（**修行者**）、**あるいはゾヴァとも呼ばれる意匠は注目を集めた**／**出典**：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ミン>

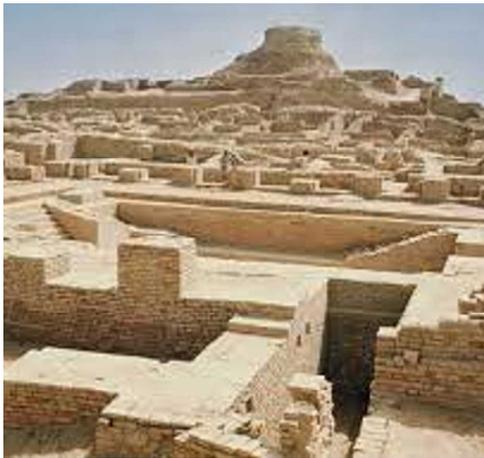
ヴァ）は「**結跏趺坐**」のように足を組んで坐禅をしているようですね。インダス文明には、こうした「瞑想」のようないくつかを営んでいたのではないかと推察されているのです。こうしたことが、後に登場する仏教にも影響していると言われています。また、次の写真はインダス文明の遺跡（[kotobank.jp/word/](http://kotobank.jp/word/) <https://kotobank.jp/word/インダス文明-32970>）です。水路など建築的にはかなり進んだ技

(I) 仏教以前

術があった文明であることが分かります。



●インダス谷の遺跡発掘の  
中で見つかった印章



●インダス文明の遺跡

②アーリア民族のインドへの移住

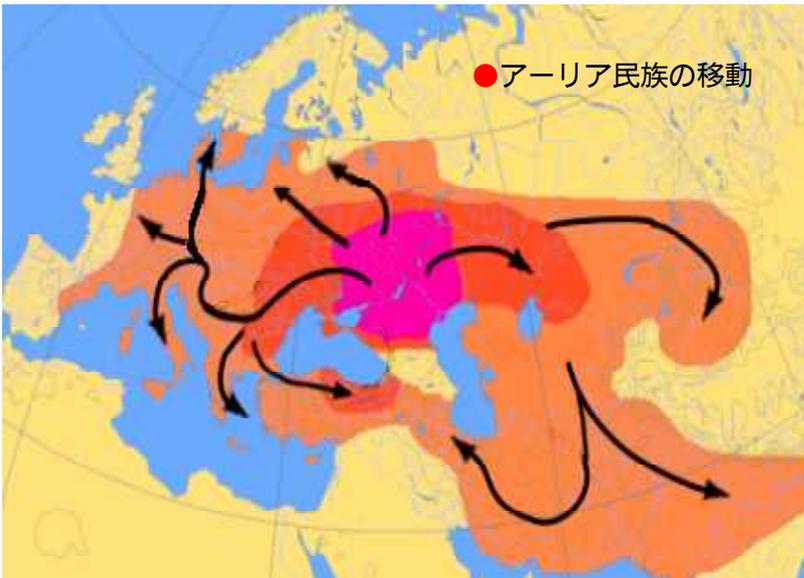
(ア) 元々は、コーカサスの北方にいた民族。一部は、西に移動し現在のヨーロッパ人の起

源となる。

(イ) 別の一部は、紀元前一七〇〇年ごろ南下し、その一部は西に進み、イラン人となり、一部は東に向かってインドへ進んだ。

(ウ) 彼らは、同じ言語を使用していたので、言語の上から民族を分ける時、インド・ヨーロッパ語族と呼ぶ。〈例〉マ(英語)とna(インドのサンスリット語)。

(エ) 東に進んだインド・アーリア人は、紀元前一二〇〇年ごろには、インダス河上流に定住していた。その後、次第にガンジス河の中流地帯まで進出した。鉄器を持ち、家父長制による農村社会を営んだ。



(I) 仏教以前

この地図（[アリア民族の移動](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/5/5a/IE_expansion.png)／[https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/5/5a/IE\\_expansion.png](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/5/5a/IE_expansion.png)）の中央あたりの赤い領域に、アリア人が元々生活していたところがあって、西に移動したのが、今のヨーロッパ人です。そして、一部は東に、更に南へと移動しました。そこで東のインド方面へ行ったのがインドの仏教に影響を与えるアリア人です。そして西に行ったのはペルシャのイラン人になります。こうしてアリア民族というのは幅広い地域に散らばって行ったのです。

元々はコーカサスの北方にいた民族です。一部は西に移動し現在のヨーロッパ人の起源となる。ですから、英語とインドのサンスクリット語というのは基本的に同じ言葉なんですね。彼らは、同じ言語を使用していたので、言語の上から民族を分ける時「インド・ヨーロッパ語族」と呼ぶのです。その例として挙げられるのは、no（英語）とna（インドのサンスクリット語）です。

かつて、イギリスはインドを植民地にしていた時期がありましたね。そこであるイギリスの学者がサンスクリット語を読んでいたら、何とこれは英語によく似ているではないか？ と気がつきました。三百年くらい前の出来事です。東に進んだインド・アリア人は、紀元前一二〇〇年ごろにはインダス河上流に定住していた。その後、次第にガンジス河の中流域地帯まで進出した。銅器ではなく鉄器を持ち、母性ではなくて家父長制による農村社会を営んだのです。次にアリア民族が信奉したバラモン教について説明します。

(1) 仏教以前

③ バラモン教

(ア) インド・アリア人の宗教は、一般に「バラモン教」と呼ぶ。インドラ、ヴァルナ、アグニという天地のさまざまな神を崇拜する多神教であった。日本の神道に共通する点がある。

(イ) バラモン教の聖典は「ヴェーダ」と言い、それに基づいて祭式の細かい規定が定められた。その祭式を正しく行うことによって神々の恩恵を受けられると信じられた。その祭式を営む司祭者をバラモンと言い、世襲の職業となった。

(ウ) バラモンという司祭者は、一つの階級を形成した。彼らを最上として、クシャトリア（王族）、ヴァイシユア（庶民）、シユードラ（奴隸）という四つの種性（ヴァルナ／「色」という意味）が次第に成立。これがカースト（ポルトガル語）と知られるようになる。

(エ) ちなみに、現在のヒンドゥー教はバラモン教に基づく。その違いは、インドの民間宗教や土着信仰を導入して、ヒンドゥー教は、仏教の後になってから徐々に勢力を伸ばした。バラモン教のインドラ神に代わって、ヴィシユヌ神とシヴァ神が中心となった。ヒンドゥー教徒の数は十一億人で、キリスト教とイスラム教について世界第三位の人口である。

(1) 仏教以前

ですから、アーリア人が持って来たバラモン教が、だんだんとインドで、元々いたドラヴィダ人等の土着の信仰を取り入れて、ヒンドゥー教になるのです。今でのインド国民の八十五％はヒンドゥー教徒です。だから人口としては十一億人もいるのです。世界中の仏教徒よりも多いのです。ただ、仏



●バラモン教の儀式



●バラモン教のインドラ神

(I) 仏教以前

教のように世界宗教にならないのは、一つの民族・一つの文化の中に留まってしまったからです。仏教のように世界的に広まっています。

この写真はバラモン教の儀式（**バラモン教に基づくインドゥー教の儀式**／<https://ja.wikipedia.org/wiki/バラモン教#/media/ファイル:Yajnat.jpg>）です。儀式が重要視され、正しく儀式をするようにやって神の恩恵を受ける。そして自分たちの生活を良い方向に持って行くという。ですから日本人の神道的な似たような要素もありますよね。次の写真はインドラ神（**インドラ神**／<https://ja.wikipedia.org/wiki/バラモン教>）です。これがバラモン教の中心的な神様です。

#### ④ ウパニシャッド

—ヴェーダに基づく哲学的思想を展開—紀元前九世紀～紀元前六世紀

そこで、少し話が複雑になりますけれども、ウパニシャッドという思想的に紀元前九世紀～紀元前六世紀に発達した哲学・思想があります。バラモン教のヴェーダに基づいて宇宙万物の統一原理を考察してブラフマン（梵）と呼んでいます。その特徴は次の通りです。

(ア) バラモン教の神々を統一する原理を考え、さらに宇宙万物の統一原理を考察し、ブラフマン(梵)と呼んだ。一方、人間の一人一人に内在する自己の本体をアートマン(我)。この二つが合一する状態を、「梵我一如」という究極的な覚りを提唱した。

(イ) 業・行為よる「因果応報」の考えも成立した。良い業という因は、良い結果をもたらすという考え。ものごとが、神の仕業でもなく、偶然という形でもなく、業に依るという新しい見方が生まれた。

(ウ) また、人は、死を超えて次の生を受け、生まれ変わり死に変わって行くという「輪廻転生」の考えも生まれた。そして、その生まれ変わりの状態を決めるのは「業」と考えられ、輪廻転生の思想と業の思想が融合。

(エ) ここでウパニシャドにおいて重要なことは、輪廻転生を繰り返すことが好ましいことではなく苦しいことであるのび、そこから解脱することが目的となった。

ここで重要なことは二点あります。仏教でも重要視する「業」と「輪廻転生」という考え方です。

これはウパニシャドの思想哲学の中から発生したと言われています。「業」という行為による因果応報の考えも成立しました。業というのは行いという意味です。良い行いという因は良い結果をもた

らす。物事が神の仕業<sup>しご</sup>ではなく、偶然という形でもなく、私の業（行為）によるという新しい見方が生まれたのです。

もう一つは、人は死を超えて次の生を受け、生まれ変わり死に変わっていくという輪廻転生の考え方も生まれました。そして、この生まれ変わりの状態を決めるのは業（行為）と考えて、輪廻転生と業の思想が融合したのです。ここでウパニシャッドにおいて重要なことは、輪廻転生を繰り返すことが好ましいことではなく苦しいことであるので、そこから解脱<sup>げだつ</sup>・解放されることが目的となったのです。こうした考え方は仏教にも取り入れられます。

ここでヒンドゥー教の神々を少しだけ紹介してみましよう。

先ず最初の写真は「シヴァ神」です。破壊の神様と言われています（シヴァ神／[https://ja.wikipedia.org/wiki/シヴァ#/media/ファイル:Murudeshwar\\_Shiva.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/シヴァ#/media/ファイル:Murudeshwar_Shiva.jpg)）。日本には大黒天というのがありますが、それはシヴァ神の現れの一つなのです。だから日本の仏教とか神道にもヒンドゥー教は影響しているのですね。



● ヴィシュヌ神



● シヴァ神

(I) 仏教以前

次の写真は「ヴィシュヌ神 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヴィシュヌ>#/media/ファイル:Bhagavan\_Vishnu.jpg)」です。シヴァ神が破壊神であるに対して、ヴィシュヌ神は維持神と見做されているのです。また、ヴィシュヌ神の妃が女神ラクシミーと言い、これは日本では吉祥きつしやうてん天となるのです。

●ガネーシャ



もう一つヒンドゥー教の神で無視できないのは「ガネーシャ (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ガネーシャ#/media/ファイル:ガネーシャ像ネパールP6054994.jpg>)」です。頭が象で体が人間です。民衆にはすごく愛されている神様です。学びの神様で入学の願い事にはガネーシャに頼みます。その利益りやくがあるかどうか知りませんが、人によると「利きくんだぞう（象）」と（笑）。

⑤ ガンジス河の宗教の登場

ここまでは、アーリア民族が持ち込んだバラモン教やヒンドゥー教に影響した要素、そしてバラモン教に基づくウパニシャッド哲学について説明してきました。そこで仏教について語る場合には、次

に箇条書きしたように、それとはまた別の流れの文化から発生してきている背景についてお話ししたいと思います。このところを今日はしっかりと理解してもらいたいと思っています。

(ア) ガンジス河の中流域地帯にアーリア人が移住するにつれ、農業生産も高まり、多数の小都市が成立した。貨幣によって流通も増大し、商人や王族の地位が向上した。

(イ) その結果、バラモンを中心とした社会には変化が現れ、アーリア人と原住民との混血もさむらに進んだ。

(ウ) 紀元前六世紀ごろには、バラモン教への対抗や社会の変化に伴って、新しい宗教真理を求める指導者たちが現れた。彼らを「沙門しゃもん (Shramana・シユリマナ)」と呼び、釈尊しやくそんも彼らの中で修行をした。その結果として成立した仏教も当時の改革思想の中の一つである。

(エ) これらを「ガンジス河の宗教」と呼び、アーリア人のバラモン教と区別することができきる。ガンジス河の宗教としては、仏教以外に、現在インドで存在するジャイナ教がある。両方とも、バラモン教のように儀式が中心ではなく、瞑想を中心とした修行を重視した。

(オ) これは、アーリア人の移住する前から存在していた宗教形態を表すとも言える。それを示唆するのは、アーリア人の移住以前のインダス文明では、瞑想が行われていて、それはインドの原住民の宗教性の重要な要素であったと考えられる。



● ジャイナ教の旗



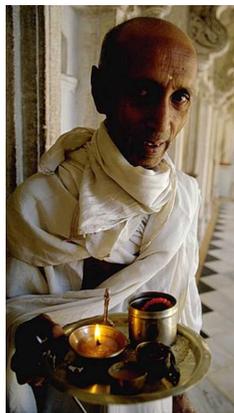
● ジャイナ教の神

仏教とジャイナ教は、バラモン教のように儀式が中心ではなくて、瞑想を中心にした修行を重視しました。それはインドの原住民の間にあった要素が瞑想とか修行なのですね。

ジャイナ教も面白い宗教です。マハーヴィーラ（前六世紀―前五世紀／ジャイナ教の祖師）はお釈迦

様とはほとんど同じ時代に活躍した人です。この写真 ([https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Ellora\\_Cave\\_32\\_si03\\_39.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Ellora_Cave_32_si03_39.jpg))を見てもほとんどブッタと変わりがなくよつに見えますよね。しかし、ジャйна教はほとんどインドから外には広まりませんでした。次の写真はジャйна教の旗 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教>)です。仏教と同じようなマーク（卍/Svastica / スワステイカ）がありますよね。

その次の二つの写真（ジャйна教僧侶ハティーシングダ寺院 / [https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Jain\\_votary\\_holds\\_a\\_votive\\_candle.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Jain_votary_holds_a_votive_candle.jpg)）はジャйна教の僧侶です。ジャйна教は完璧な無暴力を強調するのですね。だから僧侶たちはホウキを持っていて、横たわる時には、床にいる虫を踏んで殺さないようにホウキで払ってから寝るのです（写真参照 / [https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Jain\\_meditation.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Jain_meditation.jpg)）。徹底した無暴力です。



(I) 仏教以前

次の写真 ([https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Aerial\\_view\\_of\\_Bahubali,\\_Gomateswara\\_Jain\\_temple,\\_Karkal\\_a.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャйна教#/media/ファイル:Aerial_view_of_Bahubali,_Gomateswara_Jain_temple,_Karkal_a.jpg)) は壮大なジャйна教の寺院ですが、ブッダのような像が立っているのが分かります。

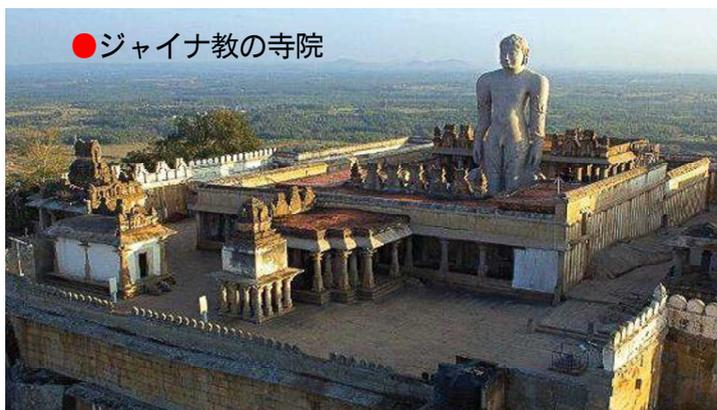
## ⑥ ガンジス河の宗教と西洋の宗教

ー キリスト教、ユダヤ教、イスラム教との違い ー

スリランカのガナナス・オベイエスケレ教授によりますと、ガンジス河流域に発達した宗教と西洋の宗教と比較して、次のようであると簡単にまとめて述べています。

〔再生教義と初期仏教の社会学への貢献〕、ウエンディ・オフラレティ (編) 『古代インドにおける業と再生』

(ア) 神の存在



(I) 仏教以前

① 西洋の宗教：預言者が超越的な神と人間の仲介となる。

② ガンジス河の宗教：悟りの体験に基づいて行者自身が教義を作る。神の存在は、あまり大きくない。

(イ) 倫理や道徳

① 西洋の宗教：神の掟（おきて、Commandment）。神の意志の現れだから、正しいとして従う。

② ガンジス河の宗教：戒律（Precepts）。人間の体験に基づいて、正しいとして従う。

(ウ) 社会や他者との関係

① 西洋の宗教：預言者の教えは神より下されたものなので、非妥協的な態度。そして、他の教えを下等と見る傾向。

② ガンジス河の宗教：教えは各行者の目覚めによるものなので、妥協的で修正可能であり、他に対して寛大な傾向。悟りの体験に基づいて行者自身が教義を作る。神の存在は、あまり大きくない。

後半はお釈迦様の話になります。前半は仏教が始まる以前の話でした。つまり、これほどの何千年

という膨大な背景があったということです。そして仏教はバラモン教にも影響されて、特にウパニシヤッドに影響されているけれども、基本的なところは、やはりバラモン教の経典などを否定していません。そして、どちらかというと、アーリア民族以前、元々インドにあった宗教性から発生した要素が基本としてあるということです。

〈質疑応答 ①〉

〈①〉 仏教とジャイナ教の一番違うところは何でしょうか？

〈ケネス〉 ジャイナ教は徹底した無暴力ということがあり、そうなると活躍する場が限られるということもあって、仏教のように他の国に伝わりませんでした。またジャイナ教は煩惱を物質的に捉えているのです。しかし基本的なところは仏教とよく似ているのですよ。また仏教のように、あまり伝道・宣教するよつなところはなかったようです。

ジャイナ教の旗には「卍」のマークがありましたね。これは仏教でも使っています。それほど共通点があるということですね。西洋ではナチスのマークに似ているので誤解されています。アメリカの

仏教の寺院が、戦前・戦時にはナチスと勘違いされるので「卍マーク」を全部取り消す動きがありました。

ジャイナ教のことを初めて聞いたという人は、どれくらいいますか？ ジャイナ教では、写真にもあるように、僧侶のような人は丸裸に近いのです。ジャイナ教には「裸の宗派」というのがあすね。ジャイナ教の修行者は真っ裸で修行するのです。ちなみに、このような状況では、寒い国には適用できませんよね。

② 「梵我一如」というのは命が終わった時の状態をいいますか？

〈ケネス〉 必ずしも命が終わった時ばかりではなくて、彼ら（ウパニシャッド推進者）にとっては悟りのような体験を説明しているのです。仏教でも法身ほっしんと仏性ぶつじょうは一体であるというような考えがあって、それと似ています。ウパニシャッドはかなり哲学的です。

バラモン教は、基本的には儀式を行って、神に祈願して、神と合致して、物事を良い方向に持って行くこととすることを置きます。それに対して、仏教やジャイナ教は精神的な面で、「悟る（目覚める）」ということに重点を置きます。ウパニシャッドも、そういうことを考え始めたのです。「梵我一如ぼんがいちによ」というのは、悟りの内容で、もちろん死んだ後にでも梵（ブラフマン）とは一体であるという。ある意味で浄土真宗的な面もありますよ。

〈質疑応答 ①〉

違いを強調すると、いろいろな違いがありますけれども、似ているところもあるのです。仏教とウパニシャッドが似ているところがあるというのは驚きかも知れませんね。

③ アーリア人がインドに入ってくる前からいた古代の人たちは、カースト制度の中ではシュエドラに属するのでしょうか？ そういう階層にだいたい押し込められたのでしょうか？

〈ケネス〉 以前からいた土着民たちは底辺の方に置かれたのではないかと思えます。カースト（ポルトガル語）というのはヴァルナ（サンスクリット語）という「色」を意味しています。だからアーリア系の人たちが支配して、以前からいた人たちは比較的「色」が黄色で、下層の方に置かれたと言われています。お釈迦様が属していた釈迦族というのはアーリア系であるのか分かっていません。元からいた人たちもクシャトリアであった可能性もあります。

③ 今ではアーリアの人たちと以前からいた古代インド人たちは混血が進んでいるのでしょうか？

〈ケネス〉 基本的にはそうです。何千年も経ているわけですから混血も進んでいます。しかし数年前にインドに行った時に、飛行機の中で隣に座ったあるインド人は、突然、私が尋ねたわけではないのに「実は私はバラモンです」と言うのでビックリしました。バラモンであることに誇りを持っている

るのです。そついつ流れは今でもあるのです。法律的にはカースト制度は廃止されていますけれども、やはり文化の中には生きています。何千年も経ているわけですから混血も進んでいるとは思いますが、すけれども。

③ カーストの違う者同士は結婚することも許されなかったわけですよ。すると、混血化しているというのは最近のことなのでしょうか？

ケネス カーストとして主な四つを取り上げましたか、実はかなり細かく分かれています。ですからカーストあるいはジャーティ（生まれ）によって、職業と結婚はかなり規定されています。ですからそのカースト内で結婚しています。バラモンというカーストの間では、混血は進んでいないですが、彼らを全人口からすると少ないと思われれます。その点では、日本の武士と似ていてはいないかと私は考えています。したがって、はるかに多い他のカーストの間では、混血は長い間に進んだと思います。

④ 「卍」は卍の意味があるのですか？

ケネス 「卍」はsvastika スヴァスティカと言って、幸せの生き方というか「幸せ」を象徴している文字です。「転迷開悟」と言っていて、そのよつな悟りを開くよつな生き方です。「astika」

〈質疑応答 ①〉

のは「存在」の意味です。仏教もジャイナ教も教えを実践して修行すれば、幸せな存在になれるという意味を表しているのです。「svastika」の「sv/su」は「良い」とか「幸せ」という意味です。極楽浄土のことを「sukhāyatī、スカークヴァティー（幸せを有するところ）」とサンスクリット語で言いますが、その接頭語の「su」と語源は同じで「良い／幸せ」という意味です。

それでは講義の後半に入ります。釈尊しやくそんの前半の生涯についてお話しましょう。

### 釈尊の歴史的存在

（ア） ガンジス河中流領域の大きな社会的変化の中で登場した釈尊。

（イ） 民族の衝突とも言える中で、アーリア人より以前、インドに存在していた宗教性を表す。インダス文明と原住民の宗教形態が元で、ウパニシャッド的な考え（例：業ごう）や世界観（例：輪廻りんご転生）を導入したのが、釈尊の仏教に反映されている。

〈質疑応答 ①〉

(ウ)

当時は、インド全体を統一する国家はなかった。ガンジス河中流領域には、シユラヴァースティを中心としたコーサラ国とラージャグリハを中心としたマガダ国が存在していた(絵図参照／<http://kamishiba1.exblog.jp/17092883/>)。釈尊は、両国に挟まれていたシャーカーヤ (Shakya) と呼ばれる小さな部族の王子として生まれた。



(質疑応答 ①)

## （Ⅱ）釈尊の生涯

### ① 誕生

（ア）父はシュッドドータナ（浄飯王）で、母はマヤー（摩耶）。

（イ）場所は、摩耶夫人が出産のため里へ帰る途中で休憩したルンビニーという花園で生まれた。現在はネーパール内となる。

（ウ）日本では、四月八日を誕生日（降誕会ごうたんえ／花まつり）とする。しかし東南アジアの仏教徒は旧暦の五月としている。

（エ）名前

① ゴータマ（最高の牛／部族の名）

シュダールタ（目的が達成された者／本名）

② 釈迦（シヤカ）：部族の名前

③ 釈尊：「〈釈〉迦族出身の〈尊〉者」の略称



誕生仏

（Ⅱ）釈尊の生涯

④ ブッダ (Buddha)・「目覚めた者」

(オ) 「天上天下 唯我独尊 三界皆苦 吾当安此」

お釈迦様が誕生したのは日本では四月八日、東南アジアでは旧暦の五月ですが、オーストラリアでは八月四日なんですよ。皆さん真剣に聞いていますよね。なぜでしょう？ オーストラリアは南半球なので「おしゃかさま(逆さま)」ですから・・・(笑)。このジョークいいでしょう。今まで一番いい反応ですね。

お釈迦様が生まれた時に七歩歩いて手を挙げて(写真参照／仏教伝道協会所蔵)「天上天下 唯我独尊 三界皆苦 吾当安此」と言われたという伝説が残っています。この言葉の意味については、いろいろな説があります。ある解釈では、私たちは皆ちがって独自性を持っている尊い者であると。そして三界はすべて苦である。だから私(シユダールタ)は、ここ(この世界)を安らかにするですよ。とにかく、この世の中を私が安らかにすると宣言されたそうです。

② 青年期

(ア) 母のマーヤー妃は、出産後間もなく病死。マーヤー夫人の妹であるマハー・プラジャーパテイーによって育てられる。

(イ) 実母を亡くしたこともあったからも知れないが、王子は感受性の強い青年に育った。ある日、農夫が掘り起こした虫を食べた鳥、そして、その鳥を大きな鳥が捕まえるのを見て、強い衝撃を受け、「何故、生き物はお互いに殺し合わなければならぬのか」と思い悩んだ。

(ウ) 瞑想を好む性格であり、それを証明するよう、「木の木陰で座っていた。その時、私の心に欲望を離れ、不善の思いもなく、静かな喜びに満たされていたのをよく憶えている」と、ある日の出来事を伝えている。『中阿含経』つまり瞑想を好む繊細な若者であった。



(エ) 父・シュッドダーナ王は、このような息子の性格を気にしていた。その中、ある占い師が「王子は偉大な王様になるか、優れた宗教家になる」と予言した。それを聞いて心配して、王様は王子には苦惱になる原因を排除し、周りには若いくて健康な人しか置かず、物質的にも非常に恵まれた生活を送らせた。

(オ) しかし、王子は、このような物質的快楽には満たされなかった。王子のために雇われた踊り子たちの踊りにも興味が湧かず、夜中に彼女たちがだらしなく眠りこんだ姿を見て、王宮生活の虚しさを痛感した。

(カ) やがて、王子は父親の勧めで隣国の王女・ヤシヨーダラーと結婚。しかし、結婚も決して宮殿での生活の虚しさを解消しなかった。

お釈迦様の青年期はけつこつ憂鬱ゆううつでもあって、満足していなかったようです。

そして、次は「四門出遊しもんしゅつゆう」という四方の城の門を出て行った時の有名なエピソードです。彼は城内に閉じ込められているような生活で、現実の世の中を知らなかったわけですよ。

③ 四門出遊

(ア) ある時、王子は家臣を連れて東の門から城の外へ出た。すると、衰え果てた老人が通りかかった。

若い人と健康な人しか接することがなかった王子は、「あれは何者だ？」と聞いた。

「老人でございます。」と家臣は答えた。「誰

でもあのよつになるのか？」という問いに、

「はい、人は誰しも、やがては年老いて衰えるものです。」と家臣は答えた。「私も

か？」という王子の質問に、「はい、王子もです。」という答えが返ってきた。王子は大変暗い気持ちになった。

(イ) 翌日、南の門を出たら病人に出会い。また次の日には、死者を運ぶ行列に出会った。老人と同じように見たことのない光景に驚き、家臣と同じような会話を交わし、さら



に憂鬱ゆううつになった。

(ウ) 四日目、北の門を出たら、今度は出家して修行に励んでいる沙門しゃもん（修行者）に出会った。王子は、苦悩を解消する目的で厳しい修行を行いながら、清々しく映る沙門に心が動かされた。それが王子が出家する大きな動機となった。

(エ) その後、王子は「死」について深く感じるようになった。「人の生命は何と短いことか。百歳にもならないのに死なねばならない。たとえそれ以上長く生きても、結局老衰のために死んでしまふ。(スッタニパータ)」さらに「人間は普通、死ぬという事に悩まない。それは、死が怖くないのではなく、死を真剣に考えないで避けているだけである」と王子は思った。

シユダールタ王子（青年期の釈尊）は、とても繊細な若者であって、「死」についても深く考えた。その原因としては、もしかすると実の母親を生後間もなく失ったことかもしれないでしようか。偉大な宗教者というものは、繊細であって、肉親を若い時になくしている場合が多くあります。法然も親鸞も道元もそうですね。

④ 出家

(ア) 「四門出遊」は伝説であり、この通りのがことが実際に起こったとは考えにくい。しかし、この話は王子が出家を決意した心の過程を表すものであると言える。つまり、出家の原因は老・病・死という人間の根本の苦を解決するためであった。

(イ) 王子もバラモン教の勉強を行っていたであろうが、そこには苦の解決の答えはないと考えていた。一方、王子は、非アーリア系の宗教を代表する沙門の道を追求することにした。

(ウ) 出家ということは、決して王子の独創ではなかった。古代インドの風習として、存在していた。それは、1) 学生期、2) 在家期、3) 林住期、4) 遊行期という「人生の四期」中の最後の遊行期に相当するものであった。

(エ) 二十九歳の頃、更に出家を後押しする要素も生じた。息子のラーフラが生まれ、王族の後継者を得ることができた。また、息子が成長し、愛着が増す前に出家を志したとも考えられる。

(オ) 王子は真夜中に起き、眠りこんだ妻のヤシヨーダラーと息子のラーフラにひそかに

別れを告げ、御者のチャンダカカニに愛馬のカンタカを連れてこさせた。必死に止めようと追いつがるチャンダカを振り切って、カンタカに鞭をあてた（出家の絵画／「釈尊絵伝」野生司香雪 画／仏教伝道協会所蔵）。その時の心境と思われる文章が伝わっている。

「父王よ、私は今、恩愛の情を離れて老病死をのがれる道を求めて家を捨てます。養母プラジャーパティーよ、私は苦しみの元を断とうと思います。我が妻・ヤシヨーダラーよ、人の世には必ず別れの悲しみがある。私はその悲しみのもとを断とうと思いついたのだ。」（『方廣大莊嚴經』）

（カ）このように、さみぎのみな思いを抱きながら郊外の森に着いた。身につけていた宝石などをチャンダカにわたして、城に戻るように命じた。そして、自ら髪を切って森に入ってしまった。王子の二十九歳の満月の夜のことがあった。



紀元前六世紀頃のインドでは、たくさんたくさんの沙門（修行者）がいたのです。多くの弟子を集めるような指導者もいました。釈尊しやくそんも、そのような沙門の指導者に師事します。

釈尊が出家したことに關して、現代人の中には家庭を捨てて出て行く無責任な行動ではないかと批判されることがあります。しかし、インドには、①学生期、②在家期（家住期）、③林住期、④遊行期という「人生の四期」の文化・風習があったのです。③と④は、世俗の世界を離れて行く時期なのです。インドの文化を象徴していることは、年を取ると、今までの世俗的な事に留まるのではなくて、もっと宗教的な事に力を入れて努力をします。現代の欧米や日本では、かなり世俗化しているのに、宗教の影響力が低下していますよね。一つの例としては葬式がすごく簡略化されていることが挙げられる。

この後半の部分は皆さんも聞いたことがあるのではないのでしょうか？ 自分の人生と対照させながら、どう感じるのでしょうか。出家しゅっけに關しては、釈尊は酷いことをしたと批判する人もいますけれども、これはインドのある風習でもあったのですね。全てのインド人が老いたら出家するのではなくて、やはり余裕のある人ではないと簡単にはできませんよね。高齢になった時には、家庭を守る等の世俗的なことだけではなくて、宗教的な事にも力を入れるという風習ですね。こうして、釈尊は「遊行期」に入られたというところまでです。

〈質疑応答 ②〉

① 「四門出遊」の話では「生・老・病・死」の内の老病死だけが取り上げられていますが？

〈ケネス〉 「生・老・病・死」は四苦八苦の「四苦」です。「生まれる」ということが「苦」の一つとして入っています。それとこの「四門出遊」の話は違う次元の話ではないかと思えます。「生」が入ってこない代わりに、北の門を出たら沙門（修行者）に出会いました。「四門出遊」と「生・老・病・死」との関係はあまりないと、私は考えています。ここで重要な点は「老・病・死」は誰にでも苦の原因になるといふことです。それを乗り越えた修行者に惹かれて励まされて出家するということをテーマにした話です。

〈質疑応答 ②〉

② 釈尊の青年期の頃の話の中で「虚しさ」という言葉が使われています。「虚しさ」という言葉は、浄土真宗の教えにとってはキーワードになる言葉ではないのかなと、私は思うのです。親鸞の和讃（仏・菩薩、祖師・先人の徳、經典・教義などに対して和語を用いてほめたたえる讃歌）で「本願力にあいぬれば むなしくすむるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし（高僧

和讃）「といつのもありますよね。」

しかし、現代人には「むなし」「といつ言葉が意外とあまりピンと来ないような気がしているのです。「あまりへむなしさ」なんて感じたことはないよ」という人が結構多いのですよね。それで「むなし」といっ言葉に関して、先生はどのように考えておられるのでしょうか？

〈ケネス〉

しやくそん

釈尊は若い時から非常に繊細であったといつことは、お話ししました。虫が土の中から

出て来たら、小鳥がそれを食べて、その小鳥をまた大きな鳥が食べるという逸話がありましたよね。

そういうことに悲しみを感じる。ですから繊細な人は「むなし」といつことを感じていると思えますよ。

今、私の息子の妻が危篤で死にかけていること、そしてこの二週間あまりの間に私の親しい友人二人が健康であったのに突然なくなってしまうました。これは、私にとって大変辛く、苦しく「むなしさ」を感じるところです。

仏教では「四苦八苦（生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦）」とは

別に、三つの苦（三苦）があると教えています。一つは「苦苦（くく）」——肉体的な痛みによる苦。

次は「壊苦（えく）」——物事が壊れていく苦。そして「行苦（ぎょうく）」——人間生存の無常といつ事実の中に感ずる苦」です。その「行苦」といつのは、何となく生きていることに虚しさを感じるような苦を指すと、私は理解しています。

〈質疑応答 ②〉

たぶん多く人にとっても、いつかは必ずそういう「苦」を感じるのではないかと思うのです。何か満たされないというか。いわゆる激しい「苦しみ」ではないけれども、何かもの足りないなという苦。そういう気持ちに陥ったことはありませんか。

私は若い時にそういうことをよく感じておりました。それにはいろいろと原因があるとは思っていますけれども、一つは両親が不和であったからです。一応、生活はちゃんとしてくれたのですけれども、今考えると、何か満たされていなかったと思います。特に日曜日に友達のところへ遊びに行っていて、そして夕方に家に帰るのだけでも、家に帰ってもそんなに面白くないし、翌日は学校がありますよね。学校も楽しいという感じはなかった。

そういう虚しさは、多かれ少なかれ、皆が少しは感じるのではないのでしょうか。ただ、そういう虚しさを、スポーツや歌などの娯楽で紛らわすのが現代人の生き方になっています。その虚しさの原因がどこにあるのかということをおまわり追求しないで、何かによって紛らわす。

そういう「虚しさ」というのは、よくよく自分の人生を見ると、程度の差はあることは確かです。「極楽とんぼ」のような人もいらっしゃるのですよ。しかし、そういう人たちも必ず「四苦八苦」のような困難に出会います。その時にどのようになり、それを理解して対応するかどうかところに仏教の意義があるのです。仏教は虚しさとか苦に対応できる営みです。

楽しく過ごすための方法はたくさんあります。スポーツもあるし、歌もあるし、「コンサートあるし、

海外旅行もあります。それらのように楽しくできればおおいにやったら良いのですけれども、ただ、今回、私の二人の友人が突然予期せず亡くなったことのように、あるいは私の家族の一員が若くして亡くなりそうになっていることのように、どの家族でも苦しみを感じる時が訪れるのです。

私の家族は、私がこういう立場なので「生・老・病・死」のこと等をしばしば話していますから、息子も普通の若者たちよりもよく対応できているのではないかと思えます。私が期待していることは、しっかりと受け止めて、時間はかかると思いますが、一回り大きくなってもらいたいですね。そして、その悲しみとつらさを、もっと他の方向にエネルギーを持って行ってもらいたいと思っています。それを可能にさせてくれるのが宗教や哲学であり、仏教こそその一つです。

② 特に仏教の場合は、「むなしせ」ということが菩提心ぼだいしんを発す契機になると説いていると思いますが、それをごまかせるような手立てがいっぱいある事が、今の時代に仏教がなかつながっていないというか、仏縁が少なくなってしまうというところではないのでしょうかね。

〈ケネス〉 「ごまかす」とか「紛らわす」という言葉で言えると思います。人生を楽しく経験することは必要です。けれども、それを九十五%するのではなくて、もう少し十五%でもいいから仏教のようなことに耳を向けてくれたら、人生が少しは良くなるのではないかと思うのです。ですから、私たちは仏教のメッセージを宣伝しなければならぬと思っています。

仏道を真剣に追求して歩むような人は限られています。山の頂上が麓の方と比べれば面積が少ないように、頂上を目指す人は、どの時代でもそれほど多くの人がいるわけではありません。けれども麓にいたる人でも中腹にいたる人でも、仏教の教えがためになることがあると思つたのです。人生がデコボ道（Life is a Bumpy road.（一切皆苦））であるといふことさえ、デコボコ道であることは当然であることを知るだけでも、困難に出遇ったらプラスになると思つたのです。そういうことを伝えて行くことが、私たち僧侶の使命だと思ひます。仏教の智慧のメッセージを伝えていくことです。

③ 先ほどの「四門出遊」の話で思ひ出したことがあります。以前、養老孟司先生が「四門出遊」の話をしていたことがあるそうです。あの話はよくできていて、ちょうど現代社会の都市生活のあり方と酷似しているといふのです。どういふところかといふと、要するに日常生活の中で老・病・死がとも見えづらい環境があるといふことです。

例えば、年を取って動けなくなったり病気になるたりすれば、病院や老人ホームで暮らすことになります。健康な人にとっては、病人や老人は見えないところに行ってしまうから、老・病・死といふことを考えにくい環境だし、いざ自分になった時には、老病死の苦しみに直面せざるを得ないといふことなのです。それは、ちょうど「四門出遊」の話やsさんの話とも重なるなと思つて、それを皆さ

んと共有したいなと思いました。

〈ケネス〉 確かに三世代と一緒に住まないということになると、お爺さん・お婆さんのことはよく知らないし、死についても、自宅で亡くなるのではなくて多くの場合は病院で亡くなります。けれども、若い時でも同級生が亡くなるとか、そういう体験はしているのではないのでしょうか？ ただそれほど頻繁になれば、影響を受けることも少ないかも知れない。確かに現代社会には、そういうような老・病・死が隠れてしまっている。しかし老・病・死は避けることはできません。普通に暮らしていると、老・病・死は周囲には実際はあるのですよ。ただ関心が向かないとか、忘れてしまつとか、無視してしまっています。

苦に向き合う、虚しさに向き合うということは、その人にとって、精神的には少し辛いかも知れませんが、それを本当に理解すると、人生に対してもっと積極的に、深く生きるようになるのではないかと思います。

簡単に言つと、お爺さん・お婆さんが亡くなるということを知ることがあれば、もっとお互いを大切にします。わがままを言うことを少しでも控える。そのようにして「苦」や「虚しさ」ということは、普通の生き方を深めてくれる。また感謝の気持ちも強くなると思うのです。だから目の前に老・病・死の人がいるということとは、本当は有り難いことだということを感じる。永遠に在るわけでは

〈質疑応答 ②〉

ないのだと。

老・病・死の事は、みんな頭では知っているかも知れませんが、それを心から知っているわけではないのですよね。それが、私が今日の冒頭でも言いました「知識と智慧ちえの違い」なのです。だから、いろいろ話しましたがけれども、知識を智慧に変えるということは、自分に当てはめるといふことだと  
思うのです。自分に当てはめることによって、もっと深く、もっと有り難く日常を過ごせるようになると思います。



● 皆さんからの積極的な質問・感想・意見をお待ちしております。

どんなに素朴であっても、皆さんの生活感覚から出る素直な問いが、より豊かな講義を創りていきます。

仏教の教へは、そもそも私たちの一般的な見方とは異なることがしばしばあります。そこがある意味で大切な「気づき」を生むポイントにもなります。